2012/03/20

【**組織的な若手研究者海外派遣事業の帰国報告書**】

筑波大学医学群医学類　石黒悠紀子

研究施設：Chungnam National University Hospital

282 Munhwa-ro, Jung-gu Daejeon, 301-721, KOREA

所属部署：小児科、産婦人科

職名：　　Exchange student

目的：　　海外臨床留学

期間：　　2011年7月10日～24日

１．研究概要

2週間の韓国滞在のうち、1週間目は小児科、2週目は産婦人科を現地の臨床実習生と一緒に実施した。

小児科では1日目NICU、2日目から小児内科を見学した。NICUでは超低出生体重児～低出生体重児まで、RDS(新生児呼吸窮迫症候群)、PDA(動脈管開存症)、MAS(胎便吸引症候群)、敗血症、甲状腺機能低下症、てんかん、DIC(播種性血管内凝固症候群)、未熟児網膜症、鎖肛、内鼠径ヘルニア、気胸、高ビリルビン血症などの症例を見た。小児内科では、消化器内科領域で内視鏡を4件見学した（結腸ポリープ、アレルギー性ポリポーシス、食道炎）。回診にも参加し、AML、ALL、バーキットリンパ腫、副腎腫瘍、骨肉腫、若年性関節リウマチ、川崎病、特発性血小板減少性紫斑病、虫垂炎術後、髄膜炎、蜂窩織炎、帯状疱疹、手足口病、マイコプラズマ肺炎、ウイルス性胃腸炎、尿路感染症、不明熱などさまざまな症例を見た。また、川崎病・肺炎の症例で聴診の指導をしていただいた。

産婦人科では、外来、手術を見学した。また、臨床実習生と共にOSCEの講義を受けた。婦人科外来では、月経不順・不正性器出血から、子宮内膜症、子宮腺筋症、腎臓移植後の免疫低下による尖形コンジローマ、子宮頸癌、卵巣癌(粘液性)までさまざまな症例が見られた。Papスメア・Emスメアはもちろん、外来のconization（CIN）も見学することができた。コルポスコピーを実際に見て所見を述べたり、スメアなどの手技も指導していただいた。産科外来では、高血糖、甲状腺癌(濾胞癌)などの症例を見て、Down症診断のための羊水穿刺も見学できた。Down症が疑われる胎児の家族に対するインフォームドコンセントを目の当たりにし強く印象に残った。手術では、主に腹腔鏡を用いた子宮筋腫、内膜症、腺筋症、子宮脱がほとんどであった。学生の参加を積極的に促しており、学生が第2助手に入ることもまれではなかった。最終日には、私も帝王切開の助手として術野に入ることが許された。OSCEの講義は産婦人科領域のもので、クスコーの使い方、双手診など日本のOSCEとおおよそ同じものであった。

２．日本との相違点

　筑波大での臨床実習の前に留学に行ったため、留学当時比較することはできなかったが、現在帰国して臨床実習を行っている上で、特に婦人科領域で異なっていたことを述べたい。

まず、日本よりも進んでいる面としては、外来での治療を柔軟に行っているということだ。例えば筑波大では入院が必要な円錐切除術(子宮全摘除術の術式決定のため、治療のために問わず)が、忠南大学では外来で行われており、患者はその日のうちに帰宅できる。また、筑波大は全身麻下での手術であるが、忠南大学は局所麻酔下であり、麻酔による負担が小さい。施術自体のリスクに関して比較することは難しいが、患者からすれば外来での施術の方が負担は少ない。また、子宮内膜症の治療に関してMirenaを採用していた。筑波大学では3月末から導入される。保険適用も韓国の方が早く、過多月経に苦しむ患者さんにとっては韓国の方が治療の幅が広い。

　そして、忠南大学では、医学教育を英語で行っていることは重要な点である。学生は英語の教科書を読み、韓国語の外来で何が話されているのかを逐一通訳してくれた。海外に留学する学生も多く、医学英語ができれば他国で臨床の勉強をする選択肢が広がる。日本の大学も見習わなければならないと思った。

　日本の方が進んでいると感じた面は、手術室での手洗いの仕方だ。忠南大学産科の手術では、ブラシを指先だけでなく肘まで使うことが義務付けられていた。筑波大学では、感染の温床になるためブラシは指先のみ使うことになっている。また、ガウンはディスポーザルではなく滅菌したものを繰り返し使っていた。(しかし、環境問題の観点もありどちらが適当であるかは一概には言えない。)

３．感想

　予想していたよりもかなり充実した2週間を送ることができた。特に印象に残ったのは、外来でのDown症のインフォームド・コンセントと、カイザーを手洗いで入らせていただいたことである。子宮を切開して児を取り出すまではあっという間で、その後出血が大量であった子宮が、収縮してすぐに出血が止まった時の感動は、ひとしおであった。切開部の縫合をしている間、子宮を持っていることが私の役目であった。初めて触れた子宮は硬くて大きくてあたたかかった。あの時の感触は、今でも忘れない。縫合が終わると子宮は戻され、表面の縫合も無事に終わった。私は終始緊張していたが、先生方は冷静で、私に腹部の解剖や術後管理についてなど説明することも忘れなかった。

　たくさんの失敗もしたが、先生方や学生が優しくカバーしてくれたことがとても嬉しかった。特に、私は韓国語がわからなかったので通訳をしてもらえたことは助かった。英語も聞き取りやすく、英語圏への留学の準備や心構えができたと思う。同じアジア人としてもやはり気が合い、週末はソウルの観光地に連れて行ってもらった。

　4年生のうちに海外で実習ができたことは、大変有意義なことであった。これからも、常に積極的に学ぶ姿勢を忘れずに、邁進していきたい。



